

縄文後期黒色磨研土器

— 所謂磨研土器の系譜とその背景 —

賀川光夫

縄文式土器という名称は、日本列島の先史土器のうち弥生式土器を除く通用語として、広くもちいられている。そして、縄文を施文するというイメージが強烈であるにもかかわらず南北に長い日本列島では必しも「縄文ころがし」の技法をもちいていない。九州で縄文が盛行するのは主として後期で、磨消縄文の技法が顕著に普及してからである。もちろん縄文そのものは、撚糸文を含めて早期以降の各時期に、僅少なながら混入しめとめられていた。それが中期の阿高式土器に共伴または単独で瀬戸内一帯の撚りの堅い船元式土器が東北九州一帯に広い分布をみるようになる。この東からの縄文技法が主体となり後期の磨消縄文を開花させた。縄文技法の系列は、中期の船元式土器の西漸によるものと考えられることができるが、それでも後期の磨消縄文の発達まで、「縄文ころがし」の技法は、北部九州各地一帯で大勢を占めるにはいたらなかった。もともと九州は、大陸、半島に接した地方で、草創期からその影響が強い。隆帯文の起源は12,000年を数え、共伴の細石器を含めて大陸に関係を求めることができるし、西日本の土器起源を縄文技法以外のもので探索できる。

縄文終末期の磨研土器も、黒褐色の強い精整研磨土器で、これを朝鮮半島の黒陶と大陸に関係があるのではないかと考える筆者に対して、縄文土器の体質の中から生じたものだとする考えもある。しかし、九州の縄文後期末葉からの黒色に研磨された土器は、縄文文化と汎称するにはあまりにも特異なものである。梅原末治博士は、黒陶系土器^①として、縄文終末から弥生土器を総括して注目すべき論文を発表したが、もとより特異な縄文終末期の土器に関する問題提起であった。

縄文終末の磨研土器は、問題を含みながらも、土器を中心として、弥生前段の問題追求という課題での研究が盛になった。筆者は縄文技法の終息という問題が狩猟と魚撈、採集社会から農耕への転期という意味でとらえ、晩期土器の分類整理を実施してきた。ところが磨研土器の出現について、いささか課題提起におわり、その内容にふれぬままであったので、縄文の終息と、磨研土器の出現に焦点をあてて、その時期の文化について考察をこころみることにした。

1. 縄文後期黒色磨研土器Ⅰ式文化の諸相

(後期黒色磨研土器Ⅰ式を磨研土器Ⅰ式と呼ぶ)

縄文文化後期の終末に「縄文ころがし」の技法がみられなくなるのは、磨消縄文^②Ⅲ式C、(西平式)すなわち従来三万田式土器と汎称される時期である。縄文の消失にかわって、磨研土器が出現

する過程は、宮崎県陣内遺跡や、長崎県筏、深堀^⑤などの主要な遺跡で検討された。その結果として縄文消失、磨研土器の出現期にあたる磨消縄文Ⅲ式C期（三万田）は、遺跡の構造や、宗教上に興味深い問題がみられた。その各種現象から、土器における縄文消失は、縄文文化の体質を大きく変えて、採集（狩猟、漁撈）生活からの転期、農耕生産の開始のしるしと理解し、その前提として、土器生産とその背景を考察することにした。

集落の構造

最近九州各地の遺跡調査で、縄文後期の集落構造がある程度分明し、大要把握することができるようになりつつある。それらの中には、熊本県菊池市天城遺跡や、福岡市四箇遺跡、大分県駒形遺跡の如く、住居地帯に周溝がみられ、その溝の性格から、弥生時代の集落構造と相似た状態を観察することができる。この周溝集落は、九州の縄文晩期に、ある程度普遍^⑥した現象として注目してきたが、その状態が後期終末における集落のあり方の基本的構造になりつつあることは興味深い事例といえることができる。

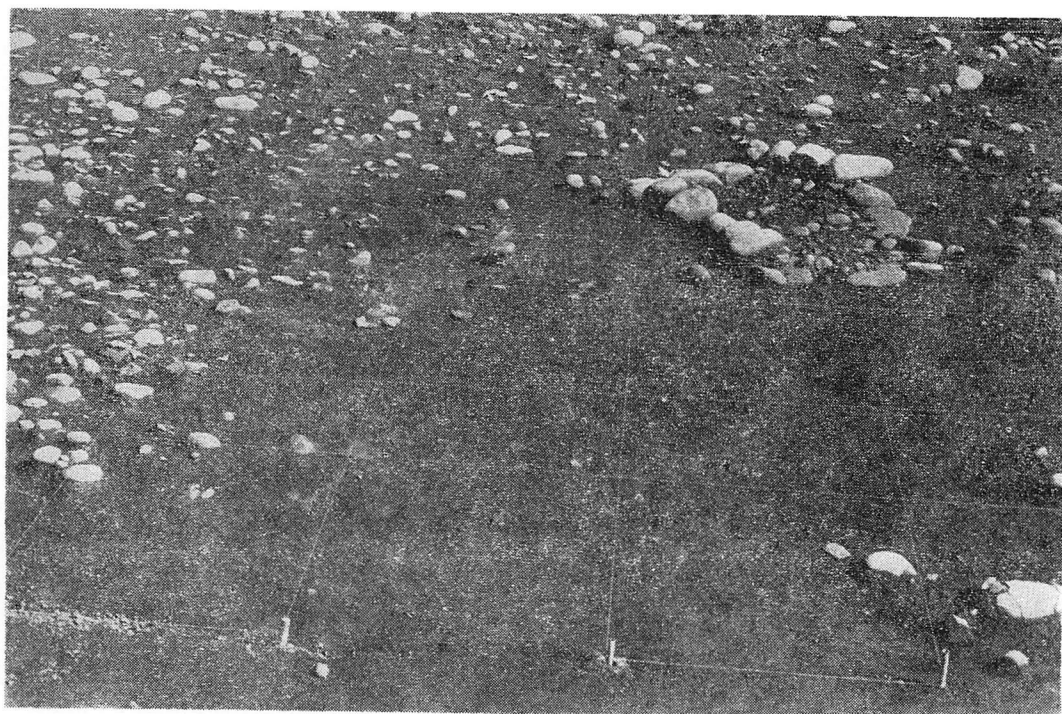
もともと、縄文時代の集落の全容を露出して、その構造を根こそぎ調査の対象とすることは、かつてなく遺跡の全容を知る手掛りはなかった。ところが昨今、農地の大規模構造改革で、高地や低湿地帯が調査の対象となるにおよんで、遺跡の全体調査が実施されることとなった。上記3遺跡は、こうした農振法にもとづく農地の改革事業の事前調査ということで広域に発掘調査し、その全容に近い状況を把握したものである。

さて磨消縄文Ⅲ式文化の有望な集落として、長崎県筏遺跡の場合は、住居群と考えられる地帯に溝状遺構が存在していたが、住居と溝との関係は確認されずにすんだ。したがって、磨消縄文Ⅲ式の時期に溝がその家族や集団の生活の場に必要な意味をもって構築されたかどうか現在までのところ明かにすることはできぬ状態であった。しかし、熊本県天城遺跡はじめ最近調査の数遺跡のごとくが、周溝または帯状溝として、集落の外郭を形成することが明らかとなった。これを「周溝集落」または「帯状溝集落」と名付けるとして、集落構造は弥生時代における「環溝集落」^⑦に類似していることが明かとなる。

集落の立地としての共通性は、底湿地（扇状地又は自然堤防）か、高地に位置し、自然地形を利用して溝を構えている。溝の状況は、いまだ明確ではないが、弥生時代におけるU字溝、V字溝ではなく、L形溝（梯形溝）としての性格が強い。この形態は後晩期全体に及ぶものと推察される。次に、周溝または帯状溝集落は、単位集団としては、他に連帯しない状態と観察される。弥生時代の環溝集落や、丘尾接断溝集落は、単位集団の結合をみることによって、単位集団（血縁共同体）の連帯をもって強化される。縄文終末における周溝または帯状溝集落は、弥生の単位集団に対してやや規模が大きく、それ自体は、連帯なしで単独に集落を構成するものと推理される。

集落は、堅穴と平地住居で、前者は磨研土器Ⅰ式（三万田式）後者は磨研土器Ⅱ式（御領式）におおくみられ、それぞれ溝をさかえに墓地帯と分離している。溝で仕切られた住居は、後、晩期を含めて、どれほどの規模になるか推定できぬが、溝の広がりや、それによって分離された住居地帯の大きさから考えて10個以上の家屋を想定することができる。

墓地は、土壙とカメ棺を主体とするが、今日までの調査ではカメ棺の数が多く、火葬骨[®]の存在から必ずしも小児埋葬とは考えられない。カメ棺に対して土壙はいまのところ発見数が少く、この関



第1図 熊本県菊池市天城遺跡 上 カメ棺地帯の石礫、下 カメ棺出土状況（熊本県教育委員会提供）

係は更に注意して調査の必要がある。熊本県天城遺跡では、墓地群中に礫槨墓があり、カメ棺、土壙に対して特殊墓と考えることができる。これらは、熊本県教育庁文化課の島津義昭技官を中心として詳細な調査を実施し、その整理がおこなわれているので、そのすぐれた詳報を待ちたい。

さて、住居と墓地を溝をもって仕切り、それぞれ固着して展開するが、特に墓地に関して注目することは、カメ棺の展開である。そして礫槨墓を中心とするカメ棺群は、集落の主体確立を推理させる。もし、集落の主体確立がカメ棺によって定形化された中で特殊墓（礫槨墓）として存在するとすれば、背景となる生産性は一体何であろうか。

生産の背景

磨研土器Ⅰ式を出土する九州の各遺跡立地状態を考えると、下記の如き環境に位置する。

A. 熊本県菊池平野の場合 三万田東原遺跡と天城遺跡の代表的2遺跡がある。前者は合志川と菊池川の間合地に立地し、後者は菊池川の流域に発達した低地を占める。両者とも水利にめぐまれ、集落形成には好地と考えられる。三万田東原遺跡は、1969年熊本県と泗水町が調査し、故坂本経堯氏^⑦はじめ、精度な調査と報告書が作成され、台地上の遺跡より2個の竪穴式住居跡と多数の遺物が出土している。天城遺跡は、前述の如く低地に立地し、周溝集落を形成し、大規模の調査がおこなわれて集落の状況が明かとなった。

B. 福岡市四箇遺跡の場合 山崎純孝氏によれば福岡市西区、早良平野を南から北に向う室見川流域の低地（水田地帯）に位置する。遺跡は、室見川の自然堤防上に立地するものと推定される。1945年6月福岡市教育委員会で調査実施中で、磨研土器Ⅰ式の溝をもつ集落といわれる。いずれ詳報があろう。

C. 長崎県筏遺跡の場合 島原半島の北端、神代川の旧河口の沖積上に位置し、標高7～8.5mの小低台地を占める。調査は1957以降7度の調査がおこなわれた。遺跡はカメ棺の群集墓とそれに隣接する住居地帯、磨消縄文Ⅲ式（西平式）A、B、C（Cは磨研土器Ⅰ式—三万田併行）、磨研土器Ⅱ（御領式）にわたる。

D. 大分県駒形遺跡の場合 九州山脈の主峰、九住、祖母山の間を東に向う大野川の支流平井川沿岸の丘陵に位置する集落跡である。標高240mの高地性の集落で、周辺に溝がみられる。1974年10月以降大分県教育委員会において調査多数の遺物が出土している。近くより（駒形B）晩期磨研土器Ⅲ式（夜臼式）のカメ棺群が出土している。大分県教育委員会より詳報があるはずである。

E. 宮崎県陣内遺跡の場合 九州山脈の南東傾面を日向灘に向って流れる五ヶ瀬川の上流域高千穂町は、小支流により解析された谷が多く、川谷間の小台地は表面平坦で遺跡が多い。陣内遺跡は、小台地（標高320m）北縁端に位置する。遺跡は数多くの人により調査がおこなわれているが、1959年宮崎県教育委員会の調査として実施され、その成果が発表されている。磨消縄文Ⅲ式から、磨研土器Ⅰ、Ⅱ式までの土器、石器が包含されていた。

以上磨研土器Ⅱ式を出土する主要な遺跡の立地をあげたが、それぞれ立地条件を異にする。低地に位置する天城、四箇は溝状遺構をもち立地から低地栽培可能な条件を占めていた。低丘陵の三万田、筏遺跡では、豊富な水系に近く畑地に加えて、低地栽培の管理が可能な場所。駒形、陣内は、

【後期磨研土器Ⅰ式（三万田式）の集落立地と遺物】

	遺 跡	立 地	集 落			石 器			石 棒 そ の 他	土 偶
			住居	溝	カメ棺	打製 石苞丁	石斧 (石鏃)	石鎌		
1	三万田	低丘陵	○	○	△	◎	○			○
2	天城	低地	○	○	◎	◎	○		△	○
3	四箇	低地	△	○	○	○				
4	筏	低丘陵	△	△	◎	◎	○			
5	駒形	高地	△	△		◎	○			○
6	陣内	高地				◎	○	○	○	○

◎ 多数 ○ 普通 △ 存在

高地性集落であるが平坦面が多く低地栽培は不可能であるが、出土遺物からみて、陸耕をおこなった可能性が強い。生産活動を考えると、どの遺跡の場合も、農耕の可能な立地を占める。

出土遺物のうち、どの遺跡でも扁平石器（打製石斧）が量産されていることがわかる。この石器が材質とその扁平加工の点で、土掘りにもっとも適していることは周知の如くであるが、特にこの種石器の量産には、石鏃の伴出量が少いことが注目される。材料の供給の点で三万田、天城両遺跡は、西合志町二子山石器製作跡^①と関連して注目された。二子山には扁平石器の材料としての良質の安山岩があり、その母岩に多くの剝離痕が存在し、多数の剝片の分布がある。こうした石器製造所から供給された石器は、三万田東原、天城遺跡などを中心に、15～16kmの範囲に及ぶものようである。

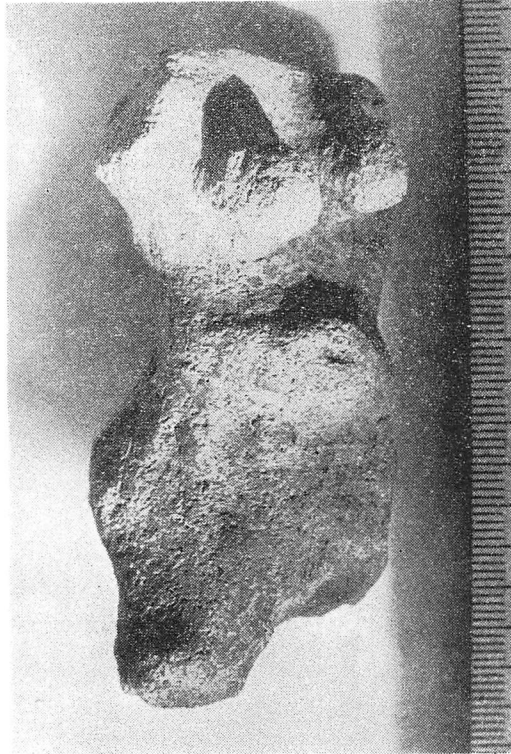
さて扁平石器は、二子山での母岩と供給範囲にみる如く、最寄りの採掘場から搬入されることが多いと考えられる。陣内遺跡では変成岩、頁岩などで、材料は五ヶ瀬川河床などに礫としてみられる。鈴木重治氏は、「扁平打製石斧の用途を中心として」とする論考を報告書で述べ、扁平打製石斧の用途を土掘り具として堅穴住居の土掘り、栽培または植物の保護育成に使用したものとしている。

石器をもって農耕論を組む方法はもう古く黴のはえた考えだ、とする批判がやたらと多いが、考古学は、遺物によって判断をしなければならぬ学問であってみれば、道具の検討は最も大切で、そうした検討なしには如何なる判断もなし得ない。そこで、扁平打製石器についてみれば、その製作技術、形態の共通により使用方法（使用痕の観察）が決まり、その観点に立つならば、量産状況、耕具と収穫具としての組成などとともに、これが農具でないとする考えは何処にもない。特に最近大形の犁形石器の出土も数多くみられ、その用途を知ることができる。

石器の考察に対して、天城遺跡では、プラントオパール^②の測定による方法で、コメが検出されたと伝えられるほか、筏遺跡では靱圧痕のある土器、磨穀石（鞍形石臼）が出土している。長崎県脇岬遺跡では、オオムギの炭化物が発見されるなど育種資料として注意すべき自然遺物が各種方法で検出されつつある。こうした、遺跡の立地、農耕具としての石器、植物育種資料など数々の視点で、縄文後期末の生産の背景を農耕をもって裏付けることは無理のない状態となったのではなかろうか。

宗教の問題

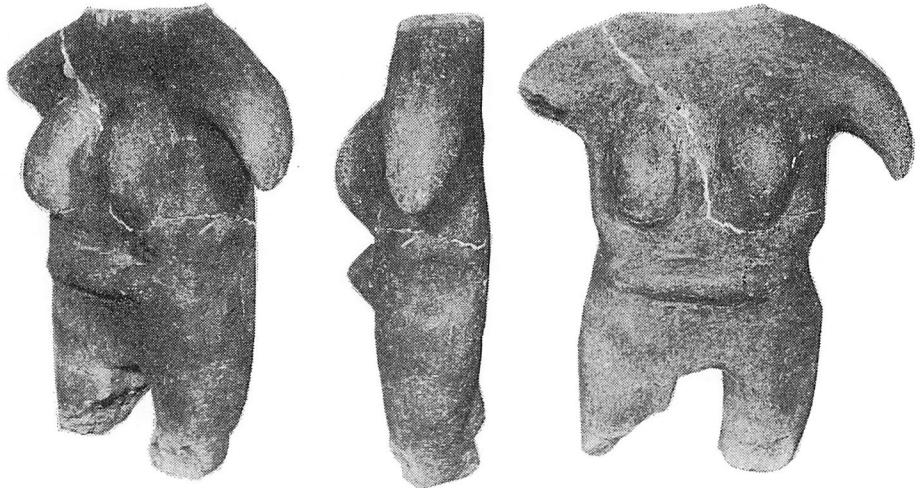
土偶と石棒がまとまって出現するのは、九州において後期磨研土器Ⅰ式である。特に土偶が一般的に女人の裸体像を主体とするところから、生産の呪符的存在とする抽象的考えがなされる。しかし、最近水野正好氏は、土偶の編年、遺物の分布などから人間社会の組織、その祭式などの形而上的な構造面を分析して「土偶祭式の復原」^⑧なる論文を発表し、この分野の重要な研究を発表された。そして土偶祭式の復原にふれ、その内容を4分類して、母となるべき女性の完全な表現から妊



第2図 土匱偶

(上) 高畑遺跡(大分)出土
8×3

(下) 陣内遺跡(宮崎)出土
12.7×6.4



娠出産への流れ、胎児の出産と損壊（殺害）、土偶片から新生な力を与えるもの。として、水野氏の土偶研究のクライマックスは、「土偶自から人々の世を演じたもの」として、「輪廻の思念の根底は、縄文時代をしめす思念である。」とする興味深く指示深い推理であった。水野氏は土偶の中の象徴的要素は縄文時代を遡るほど強く、そうした宗教的象徴思惟のなかで、土偶祭式がおこなわれていることを考えている。

九州地方で土偶が数多く発見されるのは、今のところ縄文後期末から晩期にかけてであり、その出土地は、貝塚、住居地、自然堤防など様々である。そして稀には完全な形態、すなわち女性の完全な表現をそこなうことなく発見されることもあるが、おおかた顔と、体部は遊離されている。また四体がばらばらに破損して出土する例（大分県大石遺跡）もあるが、顔と、体部の遊離が目立つ。顔の表現は、おおらかで、眉を左右にあらわし、口を凹状にしらえて表現を簡単にしているが、表情が豊かである。体部は、ヴィナス形に女体の妊娠形を写實的にあらわすが、その表現から、母となるべき女（中津市高畑遺跡）と、出産後の女体（高千穂陣内遺跡）などがあり、ここでは、出産と同時に人の手で損傷されるものばかりではなかったようである。しかし、こうした女体はいずれ新生の力を与えるために四体分離されて葬られたとみられる。陣内遺跡の場合は、埋葬を考えしめる配石がみられているので、土偶は葬られることになるのであろう。この事実から九州の後晩期土偶にも、水野正好氏の土偶祭式は当然考えねばならぬ。

さて土偶が女体の妊娠形をあらわすことと、石棒との関係は無縁とはいえず。九州で、土偶、石棒が同時に発見された遺跡は、宮崎県陣内遺跡の例がある。この両者は、女人の受胎、女人の死、新生活力（再生）の輪廻思念をより切実なことをあらわすものであろう。つまり女人の新生活力（再生）の秘儀が縄文時代の生産活動における宗教の本質的問題であるから、基本構造として「再生の原理」にもとづくものである。この「再生原理」を基本とする宗教の根原を土偶と石棒祭式に求めるならば、「再生の原理」は、まさに北方アジアにおける狩猟社会の「イヨマンテ」^⑩（シベリアにおける狩猟民の殺された動物は、ことごとく骨から再生する）と同様に骨から生命が生まれるという鳥獣破損につながるものと考えられる。

磨研土器Ⅰ式は、黒色に研磨された土器が縄文技法にかわって出現した重要な時期である。すなわち墓制にはカメ棺が一般化し、集落には溝をもちいて住居地帯を仕切る。村落共同体の生産手段に農耕が普及し、石鏃の後退によって狩猟、漁撈活動が減退すると、生産活動の方向は農耕に中心がおかれる。新生活力の秘儀は、神秘的宗教から生産祝儀へとかわり、呪術的土偶祭式は地母神的要素をも含むものと考えられる。したがって奇怪な生産のシンボルから、涓墨土偶のように生産の喜びを満面に浮かべた土偶が出現する。生命を宿す妊娠形土器も、美のヴィナス的姿態に変化して、祭式の変容がみられるのである。縄文後晩期の九州は、磨研土器の出現とともに一部では農耕を主とする生産活動にはいったものと推理される。最近の育種資料の発見はそうした事実を証明するものになりつつある。土偶、石棒は、そうした農耕生産に関係ある呪術具としての祭式を想定することは、「再生の原理」のうえから考えられることである。バラバラに破壊して葬るという水野正好氏の「土偶祭式」の発展的過程は、弥生文化における水田経営の発達をみるまで、縄文時代の宗教における秘儀として持続されるものといえる。土偶祭式の秘儀は、原始農耕の過程においても

同様に「再生の祭式」としてもちいられた。

2. 後期黒色磨研土器Ⅰ式土器

縄文後期後葉、磨消縄文Ⅲ式Cの時期に、磨研土器が出現することは繰り返し述べたが、その磨研土器の盛衰については、縄文後期を通じて下記の如き表をもって説明できる。このうち後期磨研

	形式名(特徴)	従来の呼称	四国、中国	C ¹⁴
後期 後半	黒色磨研Ⅰ	筏 C 式 三 万 田	福田 K-Ⅲ	BC. 1,200~ 1,100y
後期 晩期	黒色磨研Ⅱ (Ⅰ)	御 領		BC. 1,100~ 800y
晩 期	黒色磨研Ⅰ(2) A B 黒磨色研Ⅱ(3) A B 黒色磨研Ⅲ(4) A B	大石、上加世田 横 迫、新南部 磯石原、黒川、松添 田 村、黒ノ谷 山ノ寺、 原山、夜白、汲田	黒土 B-Ⅰ 黒土 B-Ⅱ	(大石) 2770±120 年.B.P 修正した絶対年代 BC. 830y (汲田)、2370±50 年.B.P 修正した絶対年代 BC. 420y

土器Ⅱ式(御領)は坪井清足氏の御領貝塚^①の精度な調査報告書があり、土器の全容は完全に網羅されているので本項では述べぬ。また、晩期土器についても、その概要をすでに精査して記録^②しているので、これも大きく訂正の必要がないと考えるので、省略した。ただ上表で後期磨研土器Ⅱ式を、Ⅰ、Ⅱの番号をふして後期とするか、1、2……の番号をもちいて晩期初頭とするか、現在その接点として決し得ぬまま編年を組むことにした。本稿は磨研土器でいまだ概要にとどまる磨研土器Ⅰ式のみについて検討を加えることにした。

鉢形土器(第Ⅲ図1~7)

A(1~2)、口径32cm、高14.5cmの長頸、口縁部屈折して内反し、胴部球状に誇張して底部上げ底になる深鉢形、口縁部と胴部に磨消縄文を施し、口縁部山形に隆起する。磨消縄文Ⅲ式A(西平式)の典型的鉢形土器(1)、(2)は磨消縄文の消失による線刻(x形反転の工字文くずれ)装飾で、磨消縄文Ⅲ式B(西平式)である。

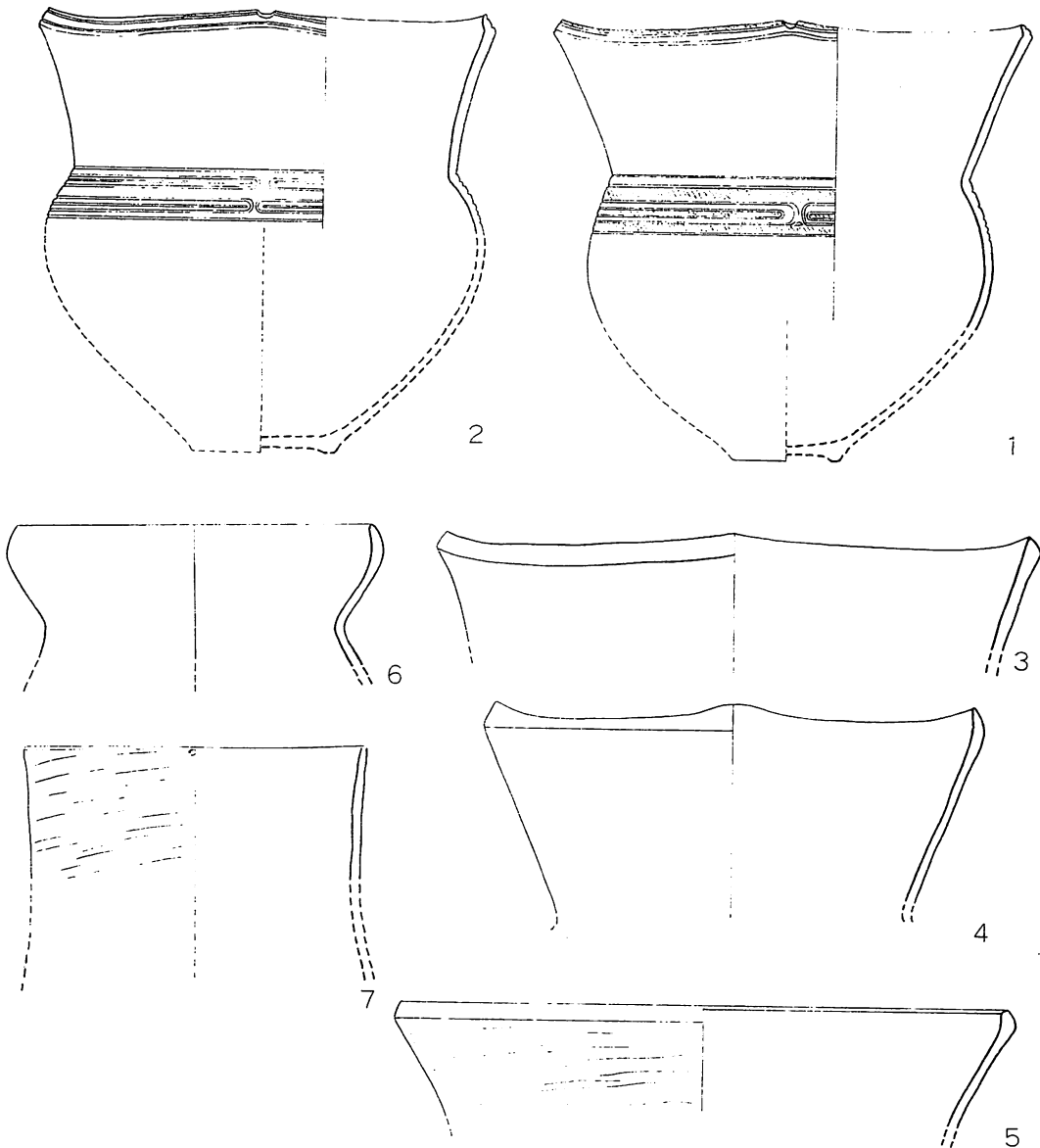
B磨消縄文、線刻について、口縁部山形の隆起顕著な無文の磨研土器(第Ⅳ図大分東台)がある。磨消縄文Ⅲ式Cで、磨研土器Ⅰ(三万田)と同類の鉢形をなし、磨研土器Ⅰ式が、磨消縄文Ⅲ式に祖型のあることが理解できる。第Ⅲ図3-5は、磨消縄文Ⅲ式Cに相当する磨研土器で、口径40cmまたは32cmの大形の鉢形をなし、無文で研磨著しい。また6は口縁部が内湾してBから分離す

る浅鉢形をなす。第V図1の祖形式と考えられる。

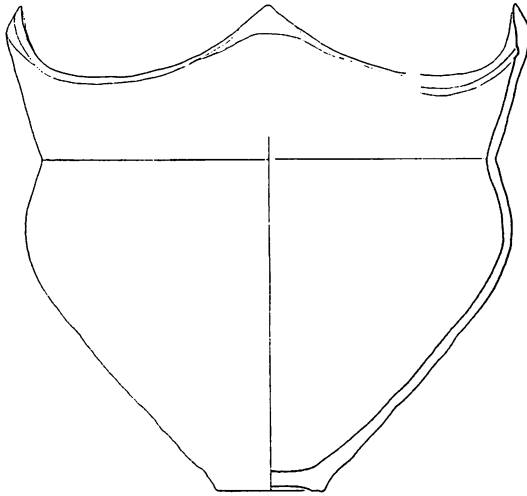
C. 浅い条痕を器面に走らせ口径44cmの大形の鉢(7)で、長頸直行の口縁部をなす。肩部以下不明であるが、やや肩部が外に張る傾向をみせるので、肩部はく字形に屈折するものと推理される。磨研土器Ⅱ（後領式）に近く、それへの移項期と考えることができる。

浅鉢形土器（第V図1～7 第Ⅵ図1～11）

D. Bの口縁部内反する形式が(Ⅲ図6)同様大きく内湾し、肩部の屈折が彎曲して浅鉢形の体部に移項する形式、口縁部と肩部上縁に凹線文を施し、磨研土器独特の羽状文を施して文様とする。



第Ⅲ図 後期磨研土器1式 1、2、磨消縄文Ⅲ式（西平式土器）
縮尺 $\frac{1}{2}$ 7のみ $\frac{1}{3}$ （三万田東原遺跡）



第IV図 磨研土器 1式 深鉢—東台遺跡

口径26cm、高12cmやや文のつまった浅鉢(第V 1)で、口径34cmの(2)同22cm(3)など大小様々であり、文様も羽状文(細ヒゲ)を基本としながら綾杉状に施すものと単刻ヒゲ状文などがある。器壁は褐色に研磨され、焼成よく胎土も細土を選択して使用している。

E. Dと同形であるが口縁部外傾しなから屈折し、口縁部と肩部に羽状文(第V図5、第VI図1~4)を施すものと、凹線文(7)と円形凹文を組合せ(4)たものなどがある。羽状文は、凹線文に沿って施したもののほか、肩線上縁に縦線(第VI図2)又は雨だれ凹文(同5)を施してその周辺に羽状文を施すものがある。いず

れも口縁部に対して高さが著しく低く、肩部から底部は皿状となる。

F. 皿状の体部に外反する口縁部がつくもので、口縁部に溝状の凹線文を施し、その下部に扇状貝圧があるもの(第V図6)。肩線上縁に2本の沈線文と羽状文のあるもの(第VI図5)。口縁に2本線、肩部に3本線文を施し、その中央線に羽状文を施すもの(6)などあり、(6)には頸部に円形凹文を施し、その周辺に羽状文をもって飾るなどにより、Fは羽状文の盛期の土器といえる。

皿形土器(第VI図7-11)

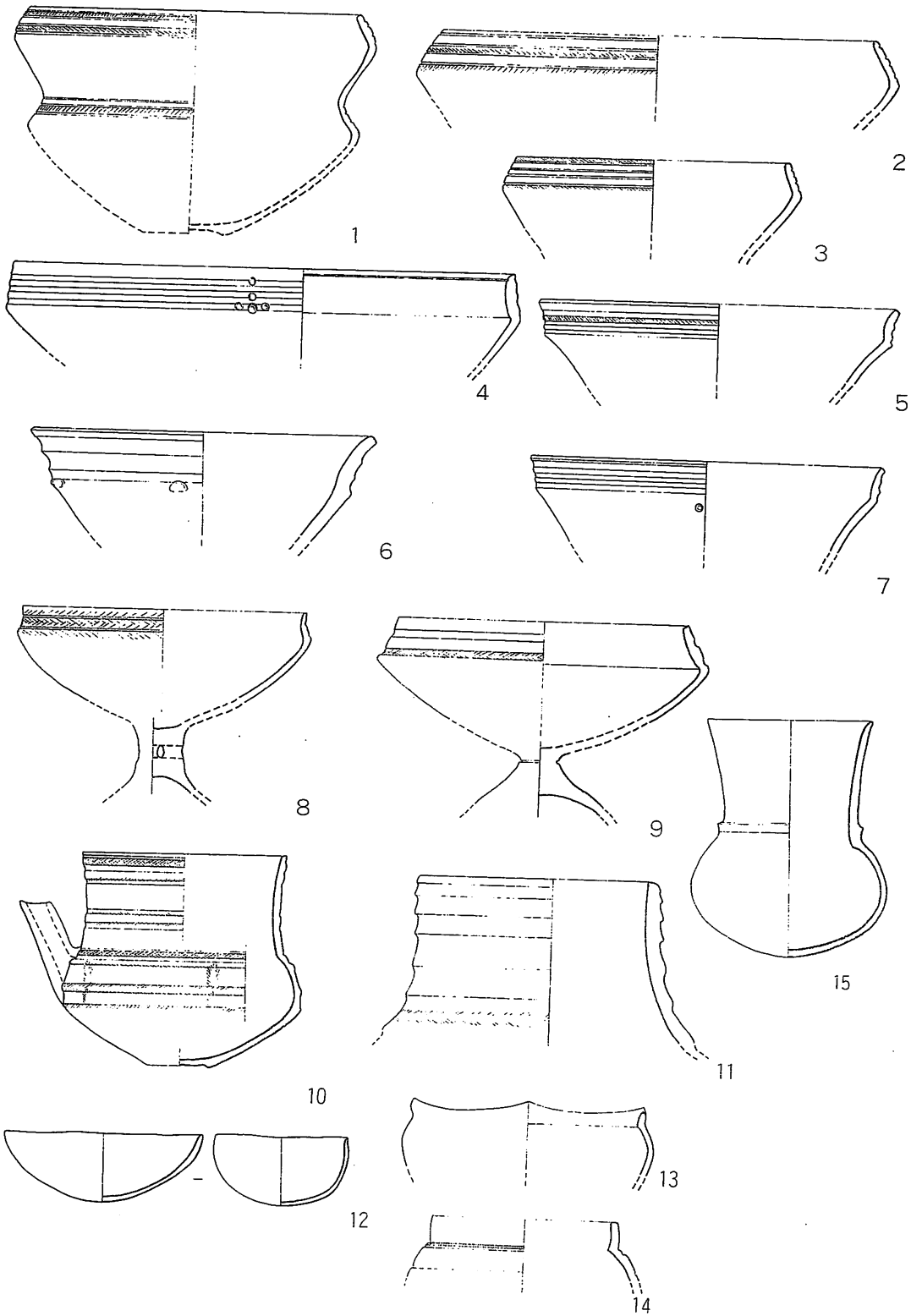
G. 皿状の体部から内曲する口縁部をもち、わずかに肩部の張りのみられるもので、口縁部に文様をみる。(7)は5条の沈線を施し、口唇部と下縁帯に縄文をみる磨消縄文施文で、(8)は4条の沈線文の上縁と、中央に波状文、下部縁帯に縄文をみる。(11)は沈線による画線を施し、その内外に磨消縄文を施す。この磨消縄文を施す土器は、磨消縄文Ⅲ式土器の影響の残るものと推理される。沈線文3条の上部画内に爪形文を施し、その中央に花文状のハリ付け文を施す(10)もの、4条の沈線文のみで複合文様をみない(9)など、皿形土器は、文様にバリエーションがある。

高杯形土器(第V図8、9)

H. G形の皿状土器を杯部として脚を付した高杯形土器で、口縁部に2条の沈線を施し、その沈線を挟んで綾杉形の羽状文を施すもの(8)、2条の凹線文の下方、凹線内に羽状文を施す(9)などがある。口径22cm~23cmで、高杯形の完備した土器である。

注口土器(第V図10、11)

I 注口土器として注目すべきもので、胴部やや屈折して張りあるもので、口縁部が直口する。注口は胴部からハリ付けられて上方に向う。口縁部から肩部に5条、肩部から胴部にかけて5条の

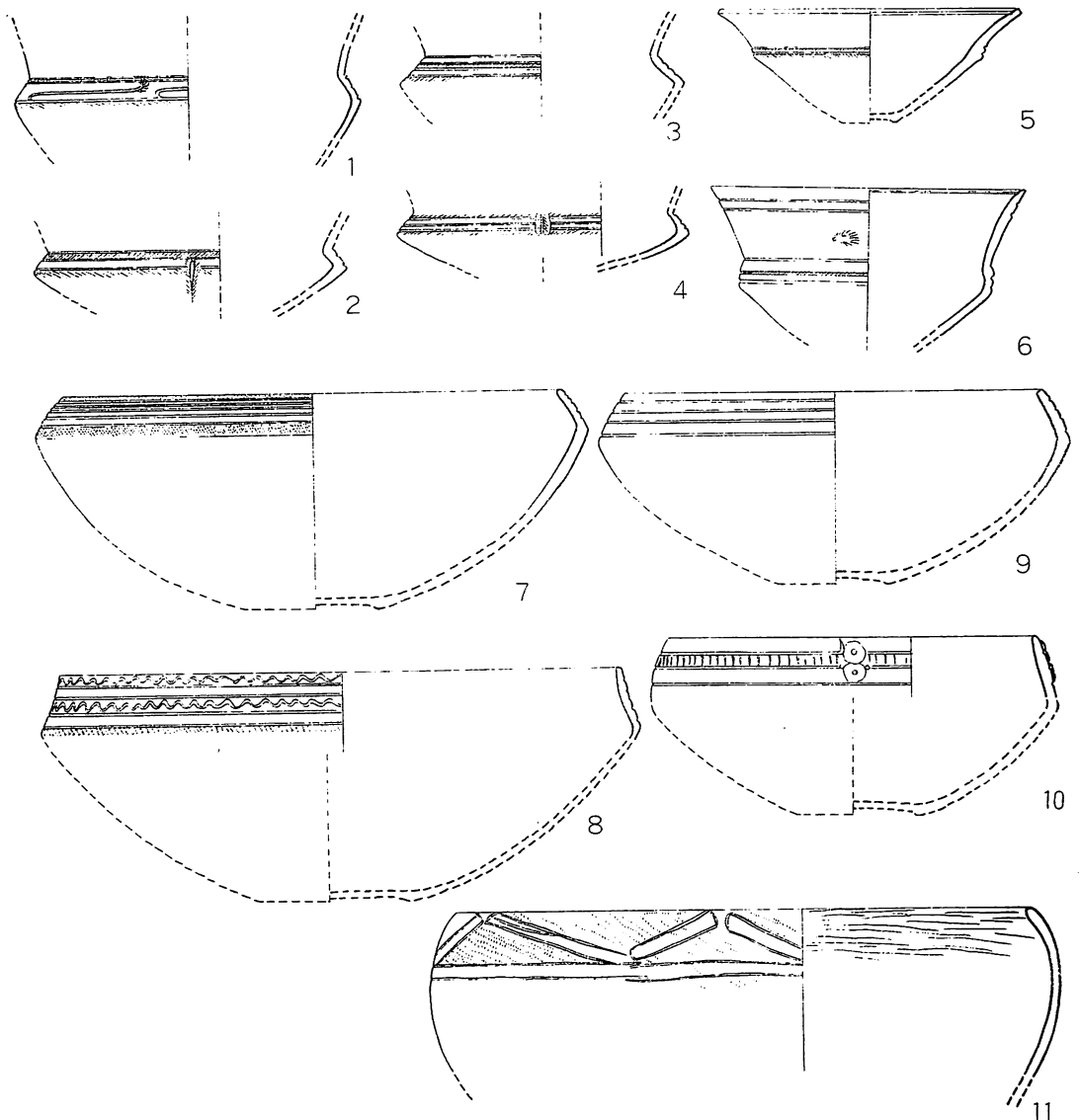


第V图 磨研土器1式 缩尺1/2 (三万田遗迹)

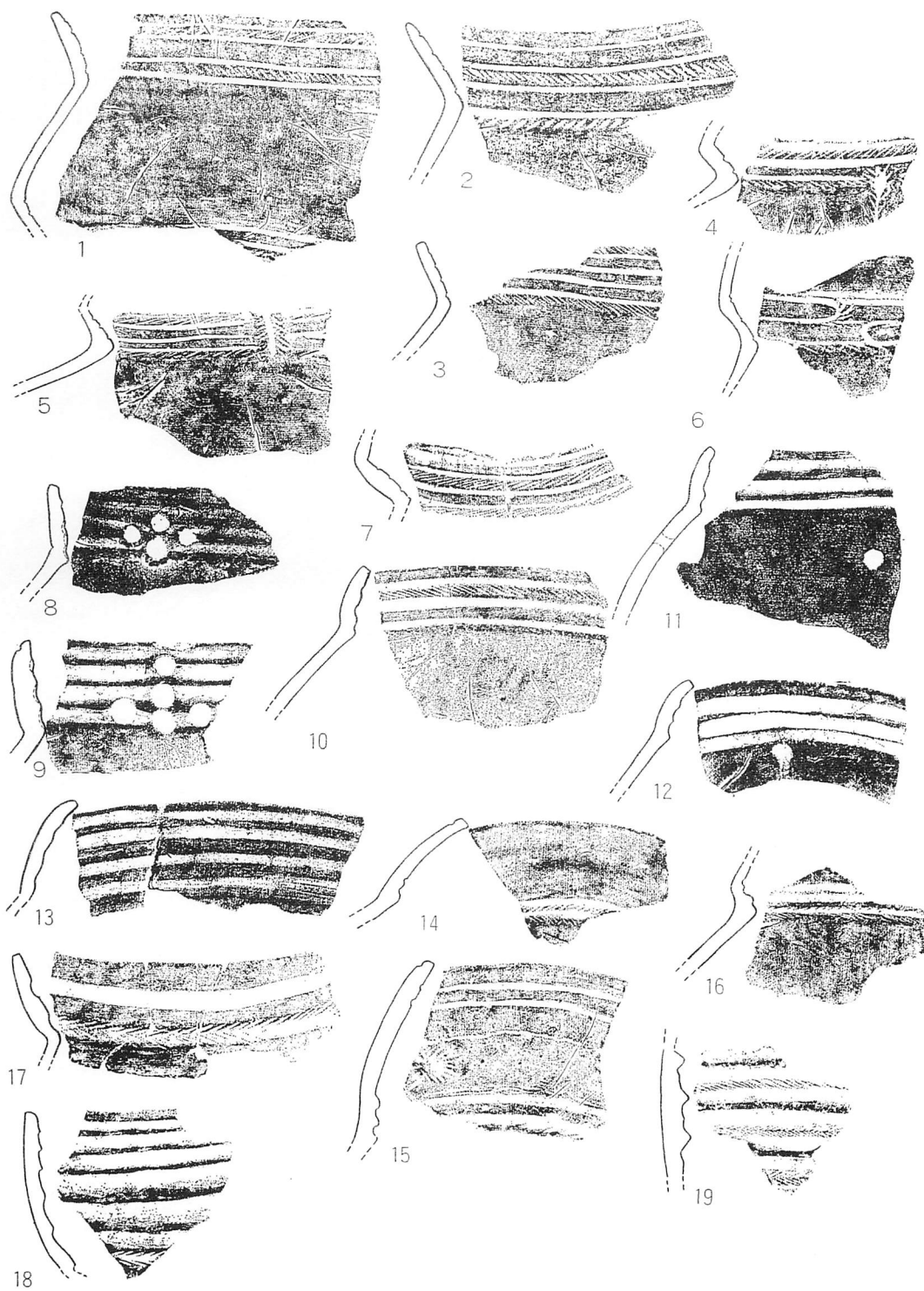
凹線文を施し、それぞれその間を羽状文をもって飾る(10)と、口縁部に段状の凹線を7条刻み、下段のみに羽状文をみる(11)などがある。前者は口径16cm、高19cm、後者は口径19cmで、器壁は黒褐色に研磨された精成土器である。

壺形土器（第Ⅴ図13—15）

J. 壺形土器を一括してJとしたが、長頸壺形（Ⅴ図15）と、広口壺（13、14）の2種類がある。前者は、球形の体部と直行する長頸部があり、その間（頸部）に凸帯1条をめぐらす。低部丸底で、全面研磨された精成土器で、口径6.4cm、高9.2cmを数える。後者は、球状の体部に短頸部が



第Ⅵ図 後期磨消縄文1式土器 縮尺 $\frac{1}{2}$



第Ⅶ図 後黑色磨研土器 1 式文様 (三万田東原遺跡)

らなる壺形で、(13)は口縁部山形に隆起し、(14)は平縁である。頸部から上腹部に2条の沈線を施し、上部沈線の上縁に接して羽状文をみる。口径15cm~18cmで、黒褐色に研磨された精成土器である。

碗形土器（第Ⅴ図12）

K. 碗形土器(12)で、口縁部楕円形（16×10cm）に整形され、高5cm、全体を黒褐色の研磨された精成土器に仕上げている。

おわりに

縄文後期磨研土器の問題を検討するために、縄文後期末の諸相と、土器について磨研土器Ⅰ式（三万田式）をあげて検討を加えた。磨研土器Ⅱ（御領式）は坪井清足氏の研究があり、土器の細部は、それによらねばならず、ここでは省略することにした。また最近C¹⁴研究、その他の事情から、磨研土器Ⅱ（御領式）とした文化を、晩期初頭とする考えもあって、今後の検討資料とすることにした。これら縄文後期文化の研究は、且て小林久雄先生の永年の研究があり、氏の研究に負う所多くここに小林久雄先生の偉大な業績に対し讃意を表したい。

本小稿に使用した磨研土器Ⅰ式土器の実測図は、赤瀬恵、高木正文、中村幸四郎の諸氏をわずらわして熊本鹿本高校郷土歴史部の資料を中心に、三万田東原遺跡出土のものを鹿本高校の好意で使用させていただいた。また一部の資料は清水宗昭氏による東台遺跡の資料で清水氏の実測になる。これら諸氏と鹿本高校に対し敬意を表し、感謝申し上げる。更に熊本県文化課は、未公開の天城遺跡の写真資料を提与され、本論文の色調に濃い花をそえてくれた。その厚意を忘れることなく明記して謝意を表す。

参考文献

1. 1969 梅原 末治 九州における中国史前の黒陶系土器 史林52-3
2. 1970 賀川 光夫 縄文後期磨研縄文Ⅲ式文化 古代学研究 57
3. 1967 賀川 光夫、内藤芳篤他、深掘遺跡、長崎大学第2 解剖学教室、人類学と先史学 1
4. 1964 賀川 光夫 縄文時代カメラ棺の出現と弥生文化前段の問題 考古学論叢 2 別府大学
5. 1952-55 鏡山 猛、甕棺累考、史淵53.55.62.九州大学
6. 1972 内藤 芳篤 福岡県京都郡荊田町浄土院遺跡調査既報、浄土院遺跡調査会
7. 1973 坂本経堯他、三万田東原、一調査概報一熊本県菊池郡泗水町教育委員会
8. 1971 三島 格他、二子山石器製作址、熊本県菊池郡西合志町教育委員会
9. 1974 水野 正好 土偶祭式の復原 信濃26-4
10. 1971 河野 広道 貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ、北方文化論 1
11. 1967 坪井 清足 熊本県御領貝塚、石器時代研究 8
12. 1969 賀川 光夫 縄文晩期九州、新版考古学講座3.雄山閣